日常アウト

レオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日常アウト

【Ｎコード】
Ｎ２１８８ＢＡ

【作者名】
レオ

【あらすじ】
・・・・最近、日常がくだらない。
高校１年生の静は自分の平凡で
日常的すぎる毎日に嫌気がさしていた。
そんな時、屋上で一人の男子と出会い・・・？

＊第1話＊

・・・最近、日常がくだらない。

あたしは桜ヶ丘学園、1年A組の谷川静（たにがわせい）。
最近、かなり日常がくだらない。
今は3月上旬。もうすぐ高校1年生の日常が終わる。
だからこそ、日常がくだらない。
いつもの学園、いつもの教室。
いつもの机にいつもの椅子。
いつものクラスメイトにいつもの教師。
いつもの授業にいつもの生活。
いつもの家族にいつもの――――
ついでに言うと、理屈をネチネチと立てて
話す人間が大嫌いだ。うっとうしい。
別に無理やり筋なんて通さなくていいと思うんだよね。
ぱっとものごと言って、間違ってると思えば
訂正すれば良い話。そんな単純な事を知らない人間に
あたしはかかわりを絶対に持たない。
むしろ持ちたくないわけで――――

高校1年生の一年、なにからなにまでいつも一緒で
最近・・・というよりか、9月ごろから
日常が日常すぎてくだらなすぎる。
なにか、変わったことはないのだろうか。
世に言う、非日常ってやつをあたしは求めてるのだろうね。

今は昼休み。
久しぶりに、屋上に行ってみようかな。

なにかあるかも。いやまぁ、ないのが9割。
でも後の1割ってのは重要なんだよ、意外と。
ま・・・くだらない可能性だけどね。

屋上に出ると、まだ冬に近い春だから肌寒い。
ひざ掛けでも持ってこればよかったかな。
いやまて、こんなところに持ってきても吹き飛ばされるよね。
そんな事を思っていると、不意に屋上の端のほうから男女の声が聞こえた。
「俺は一人の女の子と付き合うなんてことできないんだよね」
「で、でも・・・！」
「ごめんね、君もずっと俺のファンでいて？ね？」
「あっ・・・！は、はい！」
「それじゃ、また下校時に」
あたしはさっと屋上にある物置小屋の裏手に隠れた。
誰かに告白していたであろう女の子は
顔の筋肉を緩めて、口角がかなり上がっている状態で
屋上を出て行った。
会話からすると、告白した相手がかなりのモテ男で
ファンクラブまであって、で、振られて
それでもファンでいてねと言われながら
はぐかなにかをされて、あぁなったとね。
はぁ・・・くだらない告白を聞いてしまった。
まぁ・・・いいか。
昼食とろっと・・・

あたしは屋上の裏手から平然と出てきて
屋上の手すりの近くにあるベンチに座って
朝、コンビニで買ったパンをあけた。
さっき告白されていた男子は気づいてるのか

気づいてないのかしらないけど
こっちにはよってくる気配はなかった・・・はずだったけど
いつのまにか、後ろに気配を感じて振り向くと
イケメンってのがぴったりはまる、そんな男子が立っていた。
きっと、いや絶対さっき告白されてた男子だろう。
「君、さっきの会話聞いてた？」
「聞いてましたよ」
「へぇ・・・嫉妬とか、ないの？」
「嫉妬って意味がさっぱりわかりませんが」
「この学園1モテる俺がほかの女の子にはぐをしたんだよ？」
「へぇ。で？」
「え？いや、でって・・・」
「あたしあなたの事知らないですけど」
「はぁ？！」
急に大声を出されてびっくりした。
「そんなに驚く事なんですか・・・？」
「い、いや・・・俺の事知らない人なんて始めてみた・・・」
「すいませんね。」
「まぁいいよ。」
「あの。一つ言っていいですか」
「ん？何？」
あたしは思ってた事を全部言った。
「女の子にあんた思わせぶりな振り方したら
ずっと付いてきますよ。というよりか、その女の子がかわいそうですよ。」
「どうして？」
「話聞いてる限りだといままでもこういう振り方をしてきたんでしょうね。」
「まぁね」
「じゃぁ、本当に好きな人ができたとき、どうしますか？」

「そりゃ、普通に告白して、おｋもらうけど？」
「じゃぁ、あの振ったファンの子達は、どうなりますか」
「俺が誰と付き合おうと、きっと俺の事を愛してくれるさ」
「・・・・・」
こいつ・・・話にならない・・・
「もういいです。話になりません。」
「最後まで話してよ」
「いやです。失礼します」
「ねぇ」
「なんですか・・・」
早く立ち去りたい。
どれだけ非日常にあこがれたいからといって
こんなやつと話してるのはいやだ。
・・・理屈をネチネチ立てるやつよりはましだけど・・・
「明日もここ、きてよ」
「いやですよ」
「いいから、来て。」
「いやです」
「なんで？」
「・・・あたしは非日常を求めてるんです。あなたなんかに
付き合ってる暇、ないですから。」
「ふ～ん・・・じゃぁ、俺が非日常を紹介してあげようか？」
「へ・・・？」
その人の思わぬ言葉にあたしは振り返った。
その人はベンチに座って足を組んで
ニコニコと笑っていた。
「明日来てね？」
「・・・はい・・・」
「ア、名前は？」
「谷川静です」

「俺は小倉透真(おぐらとうま)」

「・・・明日も失礼します・・・」

そういってあたしは非日常という言葉につられて明日もここに来る約束をしてしまったのだった。

＊第2話＊

次の日。

いつものように強い光がカーテンから差す。
あたしはいつもの通りカーテンを開けて
いつものように朝食を食べて
いつものように制服に着替えて
いつもの時間に家をでて
いつものように登校する。
行きしなにはいつものコンビニでいつものパンを買う。

今日もいつもと同じ、くだらない日常・・・だけど
昼にはいつもと違う事がある。

昨日、屋上で小倉という人に言われたこと。
『俺が非日常を紹介してあげようか？』
この言葉に反応して承諾したけど
本当に非日常があるのか、わからない。
なにかの罠だったりしてね。
やっぱり今日、行かないで置こうかな。
いや・・・でもいかないと、いつまでたっても変わらないような気
がする。
・・・やっぱりいこう・・・かな。

いつものように教室に入って、いつものように挨拶を交わす。
「あ、静おはー」
「おはよ」
「静ちゃんおはよー」

「おはよう」
いつもの席に座る。さて。今日はどうしよう。
授業さぼるか、それとも受けるか。
これがあたしの日常の中で唯一選べるところ。
１時限目は出て、２時限目から出るかでないかなんとなくで決める。
これだけがいつも違う。そしてサボるところは屋上。
昨日屋上は久しぶりって言ったけど
昼休みに行く屋上は久しぶりって意味で
実のところは屋上は2日に1回行ってるわけで。

「静今日サボる？」
「え？あー・・・うん。今日の授業だるそうだから」
「そっかそっか。俺と一緒だな！お前も俺のなかまだ！」
「お前の仲間なんぞになりたくないよ。」
「ぐさっ俺ぐさっ来たぞ！」
「しらないわよ。あ、入り口で愛しの彼女がもじもじと
待ってるよ？浮気だと思われてもあたしは知らないからね」
「なっ！萌美～ごめん～」
いつもと同じ、くだらない会話。

朝のＨＲもたんたんと終わり
１時間目の授業も気が付けば終わっていた。
あたしはアイポッドとＰＳＰをもって屋上に行く。
これもいつもの曲にいつものゲーム。
あ、一応ひざ掛け。

屋上に出ると、やはり肌寒い。
風はそんなに吹いていなかった。
ベンチに座り、ひざ掛けをかけて、イヤホンを耳につけて
アイポッドをつけて、曲を鳴らして、ゲームをつけて

ゲームを始める。いつもと同じだ。

１０分ぐらいして不意に肩をたたかれて
ゲームを一旦とめて音楽をとめて後ろを向くと
そこには、昨日屋上で出会った
――――小倉透真が立っていた。

＊第3話＊

「1年生がサボり？」
「なにか悪いですか？」
「別に、悪くはないよ。俺もサボりだしな」
「そうですね。」
適当に会話して、またイヤホンをつけて曲をならし
ゲームを始める。丁度モンスターを倒してたところ。
するとすぐにイヤホンを片方外されて
小倉透真はあたしの目の前にきた。
またゲームを一旦とめて小倉透真を見る。
「なんですか・・・」
「俺の話、聞いてないでしょ？」
「えぇ。まったく」
「だよね。ねぇ、昨日さ俺、静ちゃんに非日常を
紹介するって言ったの覚えてる？」
「・・・はい」
「そっか、それは覚えてたんだね？」
「そこまで記憶力悪くないです」
「だよねー？それじゃぁ、非日常紹介してあげよう！」
「・・・今ですか？」
「ウン、いまだよ」
「別に昼でいいです。今はゲームしたいんで」
「いつもしてるありったけのゲームを？」
その言葉にあたしは止まった。
確かに、いつもと一緒のゲームだ。
ありったけ・・・ね
「その非日常・・・って何ですか」
「教えないよー」

「そうですかぁー」
むっすと言うと小倉透真は笑って
「ははっごめんごめんっ嘘だよ、教える」
その笑った顔に少しキュンとしたのは、あたし。
「な、なんですか・・・」
「俺のマネージャーになってもらう」
「・・・は？！」
小倉透真の意味不明な発言に
あたしは耳を疑ったのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2188ba/

日常アウト

2012年1月6日15時51分発行